

# 文明本『節用集』喉内撥音字の字音について 『類聚名義抄』と比較して

侯 鋭

## 要 旨

在文明本《节用集》的 [ŋ] 韵尾汉字读音中，“声”姑且不论，单就“韵”而言，字音体系的区分，与中国古代的等韵学理论有着很大的关系。即符合等韵学规则者大致为“汉音”，偏离者则大致为“吴音”。这一规律主要体在对中国原音的韵尾、中心元音和介音这三点的顾及上。亦即或依前者、或依中者、或依后者之有无体现而分为“吴”“汉”。观其用例，前者、中者仅限于局部，而后者则基本含盖全部。

这种规律亦可部分见于《类聚名义抄》。说明文明本《节用集》的字音状况至少源自该书以前的时代，但至文明本《节用集》时，得到了大体上的完善。

キーワード……『名義抄』 『文明本』 喉内撥音 字音体系 韻鏡との関係

## 一、はじめに

文明本『節用集』に関する呉音の研究や漢音の研究は、すでに数多く行われている<sup>1)</sup>。しかし、その呉音と漢音はどのような対応関係をしているか。呉音と漢音の分類は中国字音のどのような問題が反映されているのか。いわば、呉音・漢音対応関係のメカニズムについては、筆者の知っている限り、まだ十分に解明されていない部分があるように思われる。

本稿では、文明本『節用集』喉内撥音字の音形の母音部分（原音「韻」に対応する部分）と、字音が墨筆・朱筆に示し分けられているという標識を手がかりとして、それらと『切韻』系韻書との関わりを明らかにし、あわせて、呉音・漢音対応関係のメカニズムの一端を覗いてみたい。

文明本『節用集』は字音史上の一時点に存在するもので、それ自身の問題を解決するには、前後左右の文献を参考しなければならない。したがって、本稿ではまず前の時代の文献として『類聚名義抄』を比較の対象に選定した。選定の理由は以下の通りである。

文明本『節用集』は『下学集』を土台として表わされた辞書であるという<sup>2)</sup>。成書の成り行きに関しては、『類聚名義抄』と特に関係は無い。ところが、文明本『節用集』と『類聚名義抄』は、音注形式や字音体系において相異点を持ちながら類似点もある。例えば、『類聚名義抄』の喉内撥音字の用例は、字音表記に類音字、万葉仮名、片仮名、和音など様々な方法が用いられ、統一しない。しかし、『切韻』系中国漢字音に基づいて帰類すれば、主母音や等韻対応の面では、

文明本『節用集』喉内撥音字の字音について(侯)

表記方法が統一化された文明本『節用集』と大差が無い。また、『類聚名義抄』は、墨筆朱筆の色分けによって呉音と漢音が明記されている文明本『節用集』と違って、墨筆の「和音」と朱筆の「正音」とあっても、同辞書著者による十分な整理が行われていないため、必ずしも字音体系の様相がはっきり見えてこない。しかし、呉音と漢音が主要系統である点や、同じ字における呉音漢音の対立と認められる複数音注箇所も少なくない点は文明本『節用集』と似ている。そういう類似点と相異点を持つ両書の比較によって、文明本『節用集』呉音漢音対応関係メカニズムの時代的特性を見出すことを目的とする。

なお、叙述の便宜上、文明本『節用集』と『類聚名義抄』の名称について、それぞれ『文明本』、『名義抄』と略すことにする。

## 二、『文明本』と『名義抄』の音形の分布状況

『文明本』と『名義抄』の音形を比較・考察するために、『韻鏡』の撰別に基づいて両書の喉内撥音字の音形を二つの表にまとめた。表作成の要点は、以下の通りである。

- 1)、『文明本』における朱筆音注・墨筆音注と、『名義抄』における正音・和音・呉音の区別は無視し、それぞれの喉内撥音字の音形を直音、拗音、合拗音に分けた。
- 2)、『名義抄』に鼻音韻尾の[ŋ]を表わすための「~」記号は、表記手段として一定の意義を持つものと認められるが、煩瑣になるのを恐れて省略した。
- 3)、『両書文面』における見出し字の様々な音注表記形式を要約して、表1には片仮名音注のみ、表2には仮名音注と若干の万葉仮名+仮名の音注のみ採用している。

表1 『文明本』の漢字音形の分布状況

	直音	拗音	合拗音
通撰	ク グ クウ グウ コウ セウ ソウ ウ タウ* ツ ツウ トウ ドウ ノ ノウ フ フウ ホウ ム モウ ロ ロウ ヲ ヲウ	キユウ キヨウ キウ ケウ シ ユ ジュ シウ シユウ ショウ チウ チユウ チヨウ ユ ユウ ヨウ レウ	
曾撰	グ* コウ ソ ソウ ト トウ タ ウ* ノ ノウ ホウ ヲウ	キヨウ ショウ チヨウ ヒヨウ ヘウ ヨウ リヨウ レウ	
宕撰	アウ カウ ガウ ゴウ* ケイ* サウ ザウ ス* タウ ダウ ナウ ハウ ホウ マウ ラウ	ヤウ キヤウ ギヤウ シヤウ ジャウ ジユウ(シヨウ)* チャ ウ リヤウ	ワウ クワウ
梗撰	アウ エイ カウ ケイ ケ コウ* サウ セイ ソ* テイ タ* タウ ハウ ヘイ マウ メイ レイ	ヤウ キヤウ ギヤウ シヤウ ジャウ チャウ チヤウ ニヤウ ヒヤウ ビヤウ ミヤウ リヤウ	クワウ *
江撰	カウ ソウ タウ トウ ハウ		

表2 『名義抄』の漢字音形の分布状況

	直音	拗音	合拗音
通撰	オウ クウ ク コウ ソウ ツウ トウ 土ウ ト フウ フフ 復ウ ムウ ホウ ロウ	シウ シユウ 地ウ 主ウ 受ウ 所ウ シヨフ チウ チヨウ エ ウ* ユウ ヨウ リウ リヨウ	ク井ヨフ
曾撰	オウ 我ウ* 具ウ* 後ウ コウ ソウ トウ ノウ ホウ	キヨウ 所ウ ヨウ	井ヨウ
宕撰	カウ 我ウ サウ 坐ウ タウ ハウ ホウ* マウ ラウ	キヤウ シヤウ 者ウ 謝ウ 自 ヤウ チウ* チャウ リヤウ	ク井ヤウ 火 ウ ワウ禾ウ
江撰	カウ 我ウ コウ ソウ 土ウ ハウ		カアウ
梗撰	アウ アフ エイ カウ カフ ケイ セイ テイ ネイ ヘイ マウ メイ レイ サヒ	キヤウ シヤウ 者ウ 謝ウ チャウ ヒヤウ ミヤウ ミヤフ ヤウ リヤウ リヤフ	井ヤウ 井ヤ フキアフ ク 井ヤウ 火ウ

表1、2の\*印の音形は、他の同撰字の音形と主母音が違うもの。詳しいことは第四章参照。

先ほどの3要点に留意して両書の音形をまとめて表を作成したが、その比較した結果については次の三から述べていく。

### 三、両書音形の異同及び字音体系との関係

#### (1) 『文明本』の場合

表1『文明本』喉内撥音字の音形を文末に記してある実例表と併せて見ると、原音鼻音韻尾[ŋ]を表わすための「ウ」を表記していない音形は、朱筆音注をしている「櫻欄シユロ」<sup>3)</sup>(p 913)の「シユ」の一例のみであり、あとはいずれも墨筆音注となっている。それらの墨筆音注例の中では、陽韻字「相スノ〜」(p 1129)「良ラノ〜」(p 432) 宕韻「宕タノ〜」(p 741)、梗韻「景ケノ〜」(p 605)、梗迥韻「打タノ〜」(p 340)といった少数の特殊なものもあるが、多くは通・曾撰所属字の用例に現れている。

そういう通・曾撰所属字の用例を韻目別に見ると、東董送韻一等字は「ク」・「ロ」・「ヅ」型墨筆呉音形に対して、朱筆漢音形はそれぞれ「コウ」「ロウ」「トウ」となっている。東韻三等字の「ク」・「シユ・ジユ」・「フ」型墨筆呉音形に対応する朱筆漢音形は「キユウ」・「シユウ」・「フウ」で、「ム」の対応音形は「ホウ」。鍾腫用韻の「ク」・「グ」・「シユ」・「ジユ」・「ユ」型墨筆呉音形に対応する朱筆漢音形は「キヨウ」・「シヨウ」・「シユウ」・「ヨウ」となっており、鍾腫韻「フ」型に対応するのは「ホウ」である。冬韻の墨筆呉音と朱筆漢音の対応は「シユ」・「シユウ」となっている。また、曾撰字用例で呉音と漢音はウ表記の有無の対立のみである。

以上の観察をした結果、「ウ」表記の有無は、『文明本』喉内撥音字の音形に見られる呉音漢音分類の標識の一つとなっていることが明らかである。ウ表記は原音鼻音韻尾[ŋ]を表わすた

文明本『節用集』喉内撥音字の字音について(侯)

めのものであることは言うまでもない。表記の無いのを呉音と、表記が一貫しているのを漢音とされていることは、漢音の方が『切韻』系原音により接近している傾向があることを示唆している。

## (2) 『名義抄』の場合

『文明本』呉音のウ無表記をしている類型と比較してみると、『名義抄』の場合は、鍾韻「拱又ク呉音恐」(佛下本五七)と東韻「青桐 シヤウト」(佛下本九〇)の二例のほか、呉音・漢音問わずすべてウ表記をしている<sup>4)</sup>。これには、『文明本』のようなウ表記の有無を呉音漢音区別の標識とする見方は通用しない。しかし、その呉音漢音の相互関係に目を向けて観察すれば、両書に共通点があることが分かる。『名義抄』にある次の一群の複数音注用例を見てみよう。

筥篋空侯二音 谷云コウコ又クウコ (僧上六五) <東>  
功 音工コウ<sup>ˇ</sup> クウ<sup>ˇ</sup> (僧上八四) <東>  
聾 禾リヨウ<sup>ˇ</sup> リウ<sup>ˇ</sup> (佛中五) <東>  
恭 音供ク井ヨフ 禾クウ<sup>ˇ</sup> (僧上八) <鍾>  
縦 又音従シヨフ シユウ (法中一三四) <用鍾>  
容 禾ヨウ ユウ (法下五〇) <鍾>  
熔 音容与ウ 呉、容エウ (僧上一二四) <鍾>  
用 禾ユウ 又ヨウ (佛中一三六) <用>  
恒 禾我ウ 後ウ (法中一〇〇) <登>  
矜 音兢キヨウ 禾コウ<sup>ˇ</sup> (僧中三六) <蒸>  
鷹井ヨウ 音鷹ヨウ オウ (僧中一三〇) <蒸>

これらの複数音注例を『文明本』の呉音漢音音形や通常の呉音漢音の分類状況に照らしてまとめると、東韻の「<sup>ˇ</sup>オウ」型直音・拗音、鍾用韻の「<sup>ˇ</sup>オウ」型拗音、登韻「<sup>ˇ</sup>オウ」型直音、そして蒸韻「<sup>ˇ</sup>オウ」型拗音は漢音形であり、そのそれぞれの漢音形に対応しているのは呉音形である。要するに、『名義抄』と『文明本』の間で、ウ表記をするかしないかの食い違いがあっても、呉音漢音の対応関係に関しては一致している様子である。

## (3) 両書の比較

勿論、『文明本』の喉内撥音字に、墨筆音注でウ表記をしている音注例は存在しないのではない。通撰字「宮」の「グウ」、「宗」の「シユウ」などがそれであるが、ただ用例は窮めて少数である。圧倒的に多いのはやはりウ無表記の方である(本論文末尾用例表参照)。それは、『文明本』と同時代の『和玉篇』や『下学集』<sup>5)</sup>も同じ音注状況であることから、中世時に通・曾撰における喉内撥音字の呉音形の多くはウ無表記が普通だったことが伺える。それに対して、『名義抄』では、漢音はともかく、呉音もウ表記が主である傾向にあるが、沼本克明氏に「名義抄の『呉音』『和音』は『大般若経』という特定經典における具体相としての『読誦音』であ

って、ある特定の学派なり個人なりによって体系化されたものが一字一字の個別音として学習・伝承されてきたものではないようである」<sup>6)</sup>と指摘されたように、当時の社会において普通に使われている音形なのかどうかの疑問が持たれる。それは同じ時代の資料、文献と比較しなければならぬ問題であるが、本稿では別論に譲ることとする。

しかし、両書通・曾二撰喉内撥音字の呉音形に相異点があっても、呉音と漢音の対応関係に主母音上の共通点はある。『文明本』の「ク コウ」「シユ ショウ」と『名義抄』の「クウ コウ」「シユウ ショウ」などは、どちらも主母音[-u]と[-o]の対立を示している。また、『文明本』の「グウ キョウ」「コウ キョウ」と『名義抄』の「コウ キョウ」などは直拗の対立を示している。そういった主母音や直拗の韻書への対応状況を観察すると、両書通・曾二撰喉内撥音字の呉音漢音対応関係は、概ね一致している。従って、ウ表記の有無という点については、形の上の食い違いを持っているが、実質上、同類であると認めなければならない。

#### 四、主母音から見た両書字音の状況と字音体系の関係

表1表2の内容について、両書の字音体系を無視して、焦点を主母音に絞って見ると、概ね、通撰・江撰字の音形はそれぞれ[u][o]と[a][o]二種類の主母音、曾撰字は一種類の[o]、宕撰は一種類の[a]、梗撰は[a]と[e]主母音をしている。それらをふまえて撰を座標に両書音形の主母音の流れを描けば、個々の字をめぐる多少の違いがあるかもしれないが、大体重なっていよう。それは、各撰における日本字音の主母音の分布状況は『名義抄』の時点に既に定着している。『文明本』の時点になった時も受け継がれており、大きな変化は起こっていないと見てよからう。

ところが、字音体系別に、即ち呉音漢音の区別と言う角度から具体的に分析すると、字音の体系は主母音の如何に関わっている部分がある。その部分を大きく二つに分けると次の通りである。

##### (1) 表1表2の主母音の流れに沿った音形

まず『文明本』通撰字音を例にして見ると、墨筆呉音は、ク・グウ・シユ・シユウ・ツ・フ・ム・ユといった[u]主母音もあれば、ソウ・ノウ・ヨウ・ロウといった[o]主母音もある。朱筆漢音もコウ・キョウ・ショウ・ソウ・トウ・ホウ・ヨウ・ロウの[o]主母音だけではなく、キユウ・シユウ・チユウという[u]もある。ところが、墨筆呉音と朱筆漢音が同時に同じ字の両側に付している音注を取り上げると、概ね呉音の[u]対漢音の[o]という対応関係にあるのである。例えば、『文明本』東董送韻一等字の「ク」「ツ」型墨筆呉音に対して、朱筆漢音はそれぞれ「コウ」「トウ」、鍾腫用韻の「ク・グ」「シユ・ジユ」「ユ」型墨筆呉音に対

文明本『節用集』喉内撥音字の字音について(侯)

応ずる朱筆漢音は「キヨウ」・「シヨウ」・「ヨウ」、鍾腫韻「フ」型に対して「ホウ」、そして東韻一等字「宗」は、墨筆呉音の「シユウ」と朱筆漢音の「ソウ」の対応となっている。しかし、墨筆音注「グ・グウ」「シユ・ジユ」と反対側朱筆音注「キユウ」・「シユウ」の場合は、決して[u]と[o]の対立ではない。また、朱筆のみの音注例(本論文末尾の朱筆音注用例表参照)には、逆に同じ韻部所属で同じ朱筆音注をしているにもかかわらず、「ツウ」と「トウ」、「フウ」と「ホウ」、「ユウ」と「ヨウ」といった主母音の対立を持つ用例は多数ある。

一方、『名義抄』でも、主母音の流れに沿った音形の呉音漢音分類に関わっている現象は、大体『文明本』と同じように部分的な存在状況を呈している。文面の都合で具体的な検討は省略する。

したがって、表1表2主母音の流れに沿った音形の呉音漢音分類に関わっているのは、一部に限られているということになる。

## (2) 表1表2の主母音の流れに外れた音形

表1表2の中の\*印が付いているような音形は、同撰字の音注の同調性から見て、他の音形と主母音が違っている。表中の撰別順に実際の用例を見ていくと、次の通りである。

まず、『文明本』において、通撰の「冬タウ」(p619)は、墨筆呉音と示されているが、主母音を[a]とするのは同撰においてこれのみである。曾撰の「橙タウ」(p258)は、広韻では「下平十三耕/去聲四十八磴」とあって、梗撰・曾撰の両方に所属しているのである。朱筆音注をしているこの字について、曾撰所属とするなら主母音が合わないが、梗撰所属とするなら間違っていない。「弘グ」(p541)は墨筆呉音とされている一例のみの[u]。宕撰の「剛ゴウ」(p973)について、「ゴウ」は墨筆音注で呉音とされている。これも[a]主母音であるはずの宕撰字用例中の音注として一例しかない。「響ケイ」(p902)や「羌~/ケイ」(p916)に見られた「ケイ」は何かの勘違いによって宕撰字を梗撰字同様に処置してしまったかと思われる。朱筆音注例「兼ジユウ」(p100)・「兼シヨウ」(p977)は、それぞれ一例のみであるが、本来は宕撰所属で、いずれも他の同撰字の音注と異なっている。梗撰の「宏コウ」(p695)については、朱筆のみの「コウ」型をしている。[a]主母音であるはずの梗撰の字例として「コウ」をしているのはこの「宏」一例だけである。「噌」は朱筆「ソ」(p201)も墨筆「ソ/無し」(p890)も同じ「ソ」となっており、日本語化されたものと見てよからう。梗撰で「ソ」型音形をしているのはこれだけである。「打タ/テイ」(p340)の一例は、広韻に「タ」型に当たるような反切が見られない。「絃クワウ」(p62)について、朱筆音注の「クワウ」型はすべて宕撰所属字で、梗撰字で「クワウ」型をしているのは他例に見られない。

また、表2にある\*印の『名義抄』の音形も『文明本』と同じ性格のもので、詳しい分析を省いて字例だけここに示しておく、曾撰は「弘禾具ウ」(僧中二七)「恒禾我ウ後ウ」(法中

一〇〇)、宕摂は「悵禾チウチャウ」(法中九三)「方禾ハウ`ホウ`」(僧中三〇)などがある。

両書喉内撥音字主母音分布における同類と主母音が違う音形についての分析から、以下の幾つかの結論を得ることが出来る。

第一に、字音体系の分類に関わっている音形のグループがある。例えば、『文明本』で墨筆音注とされている通撰の「タウ」(冬)、曾撰の「グ」(弘)、宕摂の「ゴウ」(剛)、などは、同撰の他の字と違う主母音をしているものである。そのそれぞれに対応する朱筆音注として、「トウ」、「コウ」、「カウ」、「サウ」は漢音形となっていることから、前者を呉音としたのは前の章で触れた原音韻尾への配慮の上に、主母音への対応も意識されているはずである。一方、朱筆音注にも「宏コウ」のような同類と主母音が違う音形があるが、これには慣用音であるという解釈が適用されよう。また、同じ朱筆音注の「響」の「ケイ」や「羌」の「ケイ」、「兼」の「ジユウ」・「シヨウ」などの用例は、主母音が違う音形というより何らかの勘違いによるずれで、偶然性があるものと見た方が適当であろう。

『名義抄』も、文面では呉音漢音の区別が分かるような印が無いが、『文明本』乃至通常の字音体系の分類状況に照らしてみれば、曾撰「弘」の「禾具ウ`」・「恒」の「禾我ウ」、宕摂「悵」の「禾チウ」などは同じ性格のものと思われる。

したがって、主母音が同類と違う音形は、『文明本』では一部、『名義抄』ではほとんど全部を呉音と見ることが出来る。いわば、両書喉内撥音字音注の主母音の『切韻』系韻書への対応のありさまは、呉音漢音の分類の問題に一定の程度関わっていると言えよう。

第二に、「一定の程度」というのは、そういう主母音分布における同類と主母音が違う音形は数が少なく、しかも呉音だけではなく漢音にも若干見られるからである。『文明本』では墨筆・朱筆とも、『名義抄』では和音・正音とも、そういう同類と主母音が違う音形をしている用例は、ほとんど一、二例しかない少数のものであるのが特徴である。これらの用例は、孤立しており、系列的に定着しているようなものではないので、決して冒頭に述べた同類字音の全体的な主母音分布状況を左右するほどの存在ではない。主母音の『切韻』系韻書への対応と言う観点からすると、むしろ、両書とも呉音も漢音も日本語音韻と融合した形で整理された主母音の枠内に収まっているのは主流である。

第三に言えることは、そのような現象からすれば、喉内撥音字音の母音範囲内に限って、呉音と漢音の分類に関わっている要素は、第三章で見たウ表記の有無と、この第四章で見た主母音の問題の他にもあるという推定に導いてくれる。それは、次の第五章で検討を行う予定の等韻要素であると考えられる。

## 五、両書音形の等韻による検討

### (1) 『文明本』の音形と等韻の関係

『文明本』喉内撥音字全用例を観察すると、朱筆漢音のみならず、墨筆呉音にも韻尾ウ表記と主母音が『切韻』系韻書に合っている用例がある。例えば、『文明本』における見出し字墨筆音注例から次のような呉音漢音対応のものが現れている。

通撰	宮	グウ / キユウ	( p 7 )	< 上平一東 ~ 居戎切 >
	窮	グウ / キユウ	( p 462 )	< 上平一東 ~ 渠弓切 >
	擁	ヲウ / ヨウ	( p 221 )	< 上聲二腫 ~ 於隴切 >
曾撰	興	コウ / キョウ	( p 652 )	< 下平十六蒸 ~ 虛陵切 / 去聲四七證 ~ 許應切 >
	鷹	ヲウ / ヨウ	( p 227 )	< 下平十六蒸 ~ 於陵切 >
	應	ヲウ / ヨウ	( p 280 )	< 下平十六蒸 ~ 於陵切 >
宕撰	強	カウ / キヤウ	( p 457 )	< 下平十陽 ~ 巨良切 >
	郷	カウ / キヤウ	( p 672 )	< 下平十陽 ~ 許良切 >
	象	ザウ / シヤウ	( p 778 )	< 上聲三六養 ~ 徐兩切 >
	像	ザウ / シヤウ	( p 792 )	< 上聲三六養 ~ 徐兩切 >
	仰	ガウ / キヤウ	( p 832 )	< 上聲三六養 ~ 魚兩切 >
	向	カウ / キヤウ	( p 36 )	< 去聲四一漾 ~ 式亮切 >
梗撰	猛	ミヤウ / マウ	( p 13 )	< 上聲三八梗 ~ 莫杏切 >

通曾宕梗撰の右側墨筆音注(ここでは、「/」の左側)は、ウ表記も主母音も『切韻』系韻書に合わないことはない。しかし、これらの字の等位は、梗韻二等の「猛」以外、すべて三等である。その読み方として、朱筆音形は介音を持たない二等字を直音とし、介音を持つ三等字を拗音としている。墨筆音形はその反対である。朱筆の音形を漢音とし、墨筆の音形を呉音とされているからには、『文明本』における字音分類上のもう一つの要素 等韻要素が働いていることを示唆している。

また、振り返ってみると、第三章で見たウ無表記呉音形とウ表記漢音形との対応関係にも等韻の要素が含まれている。例えば、

公	ク / コウ	( p 500 )	< 上平一東 ~ 古紅切 >
功	ク / コウ	( p 536 )	< 上平一東 ~ 古紅切 >
工	ク / コウ	( p 549 )	< 上平一東 ~ 古紅切 >
孔	ク / コウ	( p 502 )	< 上聲一董 ~ 康董切 >
貢	ク / コウ	( p 502 )	< 去聲一送 ~ 古送切 >
宮	ク / キユウ	( p 501 )	< 上平一東 ~ 居戎切 >
供	ク / キョウ	( p 503 )	< 上平三鐘 ~ 九容切 / 去聲三用 ~ 居用切 >
胸	ク / キョウ	( p 549 )	< 上平三鐘 ~ 許容切 >
恭	グ / キョウ	( p 544 )	< 上平三鐘 ~ 九容切 >

これらの用例の朱筆音注では、一等字「公功工孔」は直音の「コウ」型、三等字「宮供胸恭」は拗音の「キユウ・キョウ」型音形をしている。それは、明らかに等字の区別が無くすべて「ク」型音形をしている墨筆音注より、もっと『切韻』系韻書に接近している。

したがって、介音無しの子は直音にするか否か、介音持ちの子は拗音にするか否かという等



韻対応の有無は、『文明本』における字音体系の区別を付けるもう一つの要素と見ることが出来るよう。

周知のように、『文明本』では墨筆音注より朱筆音注の出現個所は遥かに多い。漢音は等韻に関係が深いとなると、上に見た墨筆音注に対応している形の朱筆音注用例だけではなく、『文明本』に多数ある朱筆音注のみの用例も重要な対象として検討しなければならない。朱筆音注用例における音形と等韻との関係については、本稿文末に記してある朱筆音注用例をまとめると、次のようである。

通撰 介音無しの場合は「 uウ」「 oウ」型直音、介音持ちの場合は「 uウ」「 oウ」型拗音。例外は「聾レウ」(p901・東1)の一例のみで、直音のはずなのに長拗音にされている。唇音字例に直拗の区別が無く、すべて直音。

曾撰 介音無しの場合は「 oウ」直音、介音持ちの場合は「 oウ」拗音。「甌ソウ」(p663・證4)の一例のみ拗音であるべき所を直音と示されている例外がある。

江撰 原音では全部二等で、すべて直音となっている。

宕撰 唇音枠内で直音拗音の対立は見当たらない。すべて直音。

舌音枠内で介音無し字例は直音、介音持ちの字例は拗音。

牙喉(曉・匣)音枠内で直音音形は、唐部字陽部字両方に現れているが、陽部より唐部に用例数が多い。拗音音形には陽部字のみである。合拗音音形には、「鑛クワウ」(p749)一例が梗撰所属である他、すべて唐部所属字である。「ワウ」型音形の場合には陽・唐両部とも現れているが、唐音の要素を除けば陽部所属のものとなる。

齒音枠内で直音音形には唐・陽両部の用例数はほぼ半々である。陽部の方がやや多いように見えるけれども、陽部の内、三分の一ほどの用例は同じ朱音注であるにもかかわらず直音拗音の両音形とも現れている<sup>7)</sup>。拗音にはすべてが陽部所属のものである。

喉音(影・喻)枠内では「鶯」(p213)の一例のみ唐・陽両部に所属しているものである以外、すべて陽部所属で、影韻字は「アウ」型連母音(「快」一例は影・喻両方所属)、喻韻字は「ヤウ」型拗音音形をしている。

梗撰 基本的に介音無しの場合は「 aウ」直音、介音持ちの場合は「 eイ」型イ長音や少数の「 aウ」拗音。ただし、二等字であるのに拗音形(例えば、杏・獐・莖・箏・諍・笙)、合拗音形(例えば、紘)にされたりする例外は少数或いは僅かに現れている。また、「 eイ」型イ長音に現れているのは「生セイ p 3 打テイ p 173 投ヘイ p 424 莖ケイ p 12」の四例が二等字で例外である他、すべて三、四等字であり、大体乱れはない。

各撰における例外と見られる用例のなかには、同撰同等字と違う音形をしているのに、同じ音符を持つ他撰他等の文字と同じ音形をしているものがある。例えば、通撰の「聾」は二等字であって、「瀧東江<sup>2</sup>・隴東<sup>1</sup>」と同じ直音「ロウ」との期待に外れて、「龍鍾」と同じ長拗音「レ

文明本『節用集』喉内撥音字の字音について(侯)

ウ」をしている。また、曾撰四等の「甌ソウ」、梗撰二等で拗音形をする「擗」「筊」とイ長音をする「打」「投」「莖」等もそれと同類のものである。それで、音符が一緒の理由で音形が混同されているかと思ったら、逆に梗撰拗音形の「諍」「箏」や合拗音形の「紘」といった、同じ音符の字と異なった音形をしているもの、そして音符などに関係がない「杏」のような特殊な用例もある。それはともかく、いずれは等韻法則外れの用例である。但し、全体の用例を見ると、そういう等韻外れの用例は等韻に合っている用例より遥かに少なく、全体を左右するほどのものにならない少数或いは僅かな例外でしかない。結局、朱筆音注例の全体から見て、概ね等韻に合っていることは明らかである。

## (2) 『名義抄』の音形と等韻の関係

一方、『名義抄』の実際の用例を『文明本』検討した時の方法に倣って観察すると、音形と等韻の関係は次のようである。

通撰(東董送冬鍾腫用)

東1 筊篠谷云コウコ・又クウコ(僧上六五)聾禾リヨウ<sup>ˇ</sup>・リウ<sup>ˇ</sup>(佛中五)棕欄谷云シユウロ(佛下本八八)空禾ク<sup>ˇ</sup>ウ(法下五八)紅禾具ウ(法中一一五)肛音工コウ(佛中一一九・肛江、工東)功音工コウ<sup>ˇ</sup>・クウ<sup>ˇ</sup>(僧上八四)鴻禾コウ<sup>ˇ</sup>(僧中一二六)聡禾ソウ(佛中一)叢禾ソウ(僧上四二)蒙禾ムウ(僧上一八)通禾ツウ<sup>ˇ</sup>(佛上五六)東禾トウ<sup>ˇ</sup>(佛下本八五)童禾土ウ(法上九二)

董1 孔禾クウ<sup>ˇ</sup>(法下一三八)動禾土ウ<sup>ˇ</sup>(僧上八三)

送1 送禾ソウ<sup>ˇ</sup>(佛上五九)

冬1 宗禾主ウ(法下五三)

東3 雄禾オウ<sup>ˇ</sup>(僧中一三三)窮禾具ウ<sup>ˇ</sup>(法下六四)終禾シユウ(法中一一一)風禾フウ<sup>ˇ</sup>(僧下五〇)豊禾復ウ(法上九五)

東送3 衆禾シウ<sup>ˇ</sup>(僧中六)中禾チ<sup>ˇ</sup>ウ(佛上七九)虫禾チウ(僧下一五)

送3 諷禾フウ<sup>ˇ</sup>(法上七一)

鍾 癡禾云オウ・井ヨウ(法下一一三)容禾ヨウ・ユウ(法下五〇)恭音供ク井ヨフ・禾クウ<sup>ˇ</sup>(僧上八)鋒音峯ホウ・フウ(僧上一一六)供禾ク<sup>ˇ</sup>ウ(佛上二七)凶禾クウ<sup>ˇ</sup>(佛中一二六)凶禾クウ<sup>ˇ</sup>(僧下一〇八)重禾地ウ(法下四二・鍾腫)峯音蜂フウ(法上一〇九)熔音容与ウ・呉、容エウ(僧上一二四)封ボウ(佛中四九)瘡~又音慵チヨウ(法下一一七)

腫 勇音涌ユウ<sup>ˇ</sup>(僧上八五)俑勇ヨウ音(佛上三四)擁禾オウ<sup>ˇ</sup>(佛下本七三)恐禾クウ(法中八七)悚禾所ウ(法中九二)聳音悚ソウ反(佛中三・聳悚4)種禾主ウ(法下一九・腫用)

用 従禾音主<sup>ˇ</sup>ウ<sup>ˇ</sup>(佛上四〇・用鍾)頌禾受ウ(佛下本三一)訟禾受ウ(法上五七)用禾ユウ・又ヨウ(佛中一三六)縦又音従シヨフ・シユウ(法中一三四・用鍾)

東董送韻一等字 18 例の内「聾・棕・宗」3 例が拗音形のほか、すべて直音。東送韻三等字 9 例の内「雄・窮」二字が直音の他、すべて拗音形である。主な流れとして等韻への配慮をしていると言うべきであろう。

鍾腫用韻の用例では、類音字などの煩わしい計算を避けて、音形の形式だけを計算すると、(唇音 5 字を除いて)拗音形は 18 例、直音形は 8 例となっている。これも主な傾向として等韻に合っているように見える。呉音と漢音の問題として、『文明本』に照らしてみれば、直音の全

部を呉音と見ることが出来よう。ただ、主母音 [ u ]・[ o ] の違いによる判断をするのは、一部の複数音注用例では可能であるが、一字一音注の場合は複雑になりそうである。

曾撰（登等嶠蒸證）

登 恒禾我ウ・後ウ（法中一〇〇）朋禾ホウ（佛中一三八）崩禾ホウ（法上一一〇）弘禾具ウ<sup>ゝ</sup>（僧中二七）僧和音ソ<sup>ゝ</sup>ウ（佛上二）増禾ソウ（法中六六）能禾ノウ（僧下八〇・登等）  
 等 等禾トウ（僧上七九）  
 嶠 亘禾コウ（佛上七四）  
 蒸 矜音兢キヨウ・禾コウ<sup>ゝ</sup>（僧中三六）鷹井ヨウ音鷹ヨウ・オウ（僧中一三〇）應禾オウ（法下一〇三）縉禾ソウ（法中一一一）昇禾所ウ（佛中八八）陞禾所ウ（法中 p 四一）稱禾所ウ（法下十八）  
 升禾所ウ（法下一三四）證禾所ウ<sup>ゝ</sup>（法上五七）孕呉、用ヨウ（法下一三八）

登部所属が直音、蒸部所属が拗音であるのは等韻に合った全体的な流れである。複数音注が付している用例において、「恒」の「禾我ウ」は主母音が同類と違っている。「矜」の「禾コウ<sup>ゝ</sup>」と「鷹」の「オウ」は蒸部の介音ありの字音から外れている。それらは『文明本』に照らしてみれば呉音形となる。同じように、一字一音注の「弘」の「具ウ<sup>ゝ</sup>」は主母音が同類に合わないから呉音となる。「應」の「オウ」と「縉」の「ソウ」は蒸部所属で拗音であるはずなのに直音となっている。「應」は呉音と見るべきであるが、「縉」のような音注例は『文明本』にも見られるような曖昧な現象である。結局、曾撰 19 例の内、一字一音注でずれている三例と、漢音と並立している呉音三例の併せて六例の他、全部漢音となる。

江撰（江講絳）

江 肛音工コウ（佛中一一九）窓禾ソウ<sup>ゝ</sup>（法下六〇）撞禾土ウ（佛下本六三・江絳）江禾カアウ（法上一）  
 講 頂カウ（佛中一八）棒谷音ハウ（佛下本八四）  
 絳 降禾我ウ（法中四〇）

韻書では、江撰は二等字のみである。直音表記をしているのは特に問題がない。「江」の「カアウ」型音形は稀である。主母音に関しては、[ a ] より [ o ] の方がやや多い。『文明本』も同じ状況であるが、両方とも朱筆漢音にされている。

宕撰（陽養漾唐蕩宕）

陽 方禾ハウ<sup>ゝ</sup>・ホウ<sup>ゝ</sup>（僧中三〇）蜚蝗羌カウ郎ラウ二音（僧下一八・蜚羌二字同韻）僵禾カ<sup>ゝ</sup>ウ（佛上二七）強禾カ<sup>ゝ</sup>ウ<sup>ゝ</sup>（僧中二四）疆禾カウ（僧下一〇〇）粧音庄サウ（法下三六）瘡禾サウ（法下一二〇）相音サウサウ・禾サウ<sup>ゝ</sup>（佛中七六）長又チャウ<sup>ゝ</sup>・禾チャウ<sup>ゝ</sup>（佛下本三三・陽漾）張禾チャウ<sup>ゝ</sup>（僧中二六）糧音姜キヤウ（佛下本九四）薑音姜キヤウ（僧上三六）絳音襄シヤウ（法中一三五）穰シヤウ音（僧上二四・陽養）詳禾者ウ（法上五六）章禾者ウ（法上九一）障禾者ウ（法中四七）装禾者ウ（法中一五一・陽漾）床禾者ウ（法下一〇六）尚禾者ウ<sup>ゝ</sup>（僧下九九）常禾謝ウ（法中一〇二）徃禾音ワ<sup>ゝ</sup>ウ（佛上三七）房谷音ハウ・禾ハウ（法下九三）  
 養 放禾ハウ<sup>ゝ</sup>（僧中三一）網禾マウ（法中一二一）翹禾マウ（僧下四八）輞禾マウ（僧中九三）丈禾チャウ<sup>ゝ</sup>（僧中五三）像音象シヤウ（佛上一五）響音享シヤウ（僧下九五）斲音敞シヤウ（僧上一〇三）上禾ジャウ<sup>ゝ</sup>（佛上七四・養漾）賞禾者ウ（佛下本一九）壤禾自ヤウ（法中五四）  
 漾 帳禾チウ・チャウ（法中九三）向禾カウ<sup>ゝ</sup>（法下四〇）況禾ク井ヤウ（法上四三）況禾ク井ヤウ

文明本『節用集』喉内撥音字の字音について(侯)

ゝ(法上四六)餉音向シヤウ(僧上一〇六)唱禾者ゝウ(佛中四四)状禾謝ゝウ(佛下本一二九)讓禾謝ウ(法上五七)音暢シヤウ(僧下一〇九)帳禾一チャウ(法中一〇五)訪禾ハウ(法上五六)  
唐 堂禾タウ(法中五〇)康禾カウ(法下一〇五)横禾カウゝ(佛下本一〇一)糠和カウ(法下三二)  
剛禾我ウゝ(僧上九四)臧音臧サウ(僧中四一)藏禾坐ウゝ(僧上三三・唐宕)一流黃俗云ユ禾ウ(法中一三)蕘菜禾ウサイ(僧上二五)  
蕩 蟒音莽マウゝ禾マウゝ(僧下二六)廣禾火ウ(法下九九)  
宕 曠禾火ウ(佛中八八)謗禾ハゝウ(法上六二)喪禾サウ(佛上八五・宕唐)

唇音枠内で主母音に直音拗音の対立は見当たらない。すべて直音。唐部(唐蕩宕)は、「aウ」型直音と少量の合拗音のみである。陽部(陽養漾)では、45字(類音字、直拗兼有字を含む)の内10字(類音字、直拗兼有字を含む)の音形は直音をしている以外、一応「aウ」型拗音形である(内合拗音二例含む)。複数音注例に、陽韻字用例「方禾ハウゝ・ホウゝ」に[ a]・[ o]、漾部「帳チウ・チャウ」に[ u]・[ a]という主母音の対立、そして「向」の見出し字の場合に現れている「カウ」と、類音字として用いられた場合の「シヤウ」という直拗の違いは、僅かな例外である。

宕攝の音形状況は、大体『文明本』と一致している。等韻・主母音原則に合っているのが主流であり、漢音形が圧倒的に多い。

梗攝(庚梗映耕耿諍清静勁青迥徑)

庚 2 更音庚カフ・禾キヤウ(僧中六一)行禾キヤゝウ(佛上四三・庚唐)?笙音シヤウ(僧上七〇)?生禾者ウゝ(僧下九一・庚映)盲マウ(法中一二六)  
庚 3 驚音京ケイ・キヤウ(僧中一〇九)迎禾カゝウ(佛上六〇)擎ケイ(佛下本九六)鳴音名ミヤウ(僧中一二〇)明禾ミヤフ(佛中八七)榮禾井ヤウゝ(佛下末五〇)  
梗 2 猛禾ミヤウゝ(佛下本一二九)打音チャウゝ(佛下本七七・梗迥)哽禾キアフ(佛中五一)坑禾キヤウ(法中四九)礦禾火ウ(法中二)鑛禾火ウ(僧上一二五)  
梗 3 秉音丙ヘイ・ヒヤウ(法下四〇・秉丙二字とも)永禾ヤウ(法下四一)  
映 2 駢禾ヒヤウ(法上七七)  
映 3 詠禾ク井ヤウ(法上七二)映禾エイ(佛中九一)竟禾キヤウ(法上九一)慶禾キヤウ(法下一〇六)病禾ヒヤウ(法下一一三)命禾ミヤゝウ(僧中三)  
耕 萌禾マウ(僧上三六)又音鏗カウ(法中四)莖禾キヤウゝ(僧上一九)箏音争シヤウ(僧上七九)  
耿 幸禾カウゝ(佛上八四)  
諍 進ヘイ(佛上四)諍禾謝ウゝ(法上五七)  
清 盛禾謝ゝウゝ(僧中三八)貞禾チャウ(法上九六)音貞テイ(僧下八五)嬰禾ヤウ・アウ(佛中一二)成音城シヤウゝ(僧中四二)清禾シヤウ(法上二三)鉦鼓谷云シヤウコ(僧上八)正禾者ゝウ(佛上七五)聲禾者ウ(佛中一)請禾者ウ(法上五九)精禾者ウ(法下二九・清勁)嬰ヤウ(法中一五)營音螢井ヤウ(佛下末五〇)盈禾ヤウゝ(僧中一三)名禾ミヤウゝ(佛中五八)音瓊ケイ(佛中一一)正音政セイ(佛上七四)  
静 静禾謝ウゝ(僧下九九)井谷正子郢エイ(僧下八一)驄禾チャウゝ(僧中一〇一)  
勁 性音姓シヤウ(法中八五)淨禾シヤウ(法上二三)聖禾者ウゝ(佛中五)政禾者ウゝ(僧中五四)  
青 釘音テイ(僧上一二二・青勁)聽禾チャウゝ(佛中三・青徑)刑音形キヤウ(僧上九二・二字とも)經禾キヤウ(法中一一一・青徑)青桐シヤウト(佛下本九〇)冥禾ミヤウ(法下五六)鷓鴣音交カウ耆セイ(僧中一一五)醒音星シヤウ(僧下五八・青迥徑)星禾者ウ(佛中八六)青禾者ウゝ(佛中一三八・青静勁)  
迥 馨禾キヤウ(法上五八)鋌音挺テイ(僧上一一七)頂禾キヤウ(佛下本二二・誤写?)

徑 倭子イ(佛中八)定禾チヤウ(法下五二)徑禾キヤウ(佛上二三)逕禾キヤウ(佛上五四)方  
 𪛗俗音ホウキヤウ(法中七)

二等字で直音形をしているのは、21例の内8例位の比率で数は多くない。ただし、いずれも庚梗耕耿四韻の二等字の枠内に収まっている。その8例と「磧磧禾火ウ」「鑛禾火ウ」の合拗音2例を併せて漢音と見られる。残り11例の拗音形用例は、「ヘイ」音形をしている諍2「迸」を除いて、一応呉音形と見るべきであろう。ところが、その中では、庚2「笙」、耕2「箏」二字の音注は、『文明本』でも同じ「シヤウ」型音形となっているが、朱筆音注とされている。また、諍2「諍」については、『文明本』ではそれぞれ朱筆音注の「シヤウ」と朱筆音注の「サウ」と現れていることは、『文明本』音注加点のユレと見てよからう。

また、三、四等字60例の内、庚韻三等「迎」の音注「カウ」一例と、清韻「嬰」の複数音注「ヤウ・アウ」に現れている「アウ」以外、すべて拗音形と一部の「 e イ」型イ長音形となっている。同60例の内、「 e イ」型イ長音をしているのは18例(類音字を含む。見出し字だけなら13例)ある。『文明本』や通常の拗音対イ長音という呉音漢音の対応関係を参考にしてみると、『名義抄』梗撰字の音形は、呉音の方が圧倒的に多い様子である。

## 六、両書字音体系と『切韻』系韻書の関係のまとめ

今まで、両辞書の喉内撥音字の字音体系についてウ表記の有無、主母音、等韻の三点について調査、検討してきた。次にそれについて総合的にまとめておきたい。

『文明本』では、まず撥音韻尾のウ表記の有無によって呉音漢音の区別を判断することが出来るが、範囲は一部(主に通撰曾撰)に限られているもので、全体的には通用しない。

次に、主母音の違いによる呉音漢音の区別や各撰における同類と主母音が違う音形の呉音認定が出来るのは、一定の範囲に限られた局部的な用例に過ぎない。

ところが、第五章の調査・分析で分かるように、等韻への対応は比較的に広く呉音と漢音の区別に関わっている模様である。特に朱筆漢音は、慣用音や若干のユレもあるが、広汎に韻鏡の等韻に基づいた分布をしている。勿論そういうことは、梗撰三、四等字に用いられた「 e イ」型イ長音の音形も含まれている。というのは、即ち中国字音主母音への対応や介音への対応に関する問題があるにしても<sup>8)</sup>、「 e イ」型イ長音の音形は梗撰の三、四等字範囲内で行われており、しかも系統的になっていることから、『文明本』では通常に言う漢音形として、韻鏡の等韻法則を意識してまとめられていると推測することが出来よう。そういう意味で、『文明本』における喉内撥音字用例の母音事項を調査してみた結果、慣用音や少数のユレもあろうが、漢音は韻尾、主母音、そして介音の有無の三点において『切韻』系韻書に合っているのに対して、呉音形はそのどれかが欠けた形のものとなっている、ということになる。

更に、漢音を主張する特徴があるという先行研究の指摘<sup>9)</sup>によって、既に『文明本』字音の

文明本『節用集』喉内撥音字の字音について(侯)

基本的な性格は明らかにされているので、漢音が優勢であることは言うまでもない。

『名義抄』の場合は、第三、四、五章で見えてきたように、韻尾ウ表記をする音形がほとんど全部である点は『文明本』と違うが、主母音関係事項と等韻関係事項の二点で各撰において漢音形が一応『切韻』系韻書に符合し、呉音のどっちかが欠如している点は『文明本』と共通しているのである。ただし、撰別における字音の分布状況は、漢音が多いの(例えば宕撰)もあれば、呉音の多いの(例えば梗撰)もあり一定しない。

『名義抄』と『文明本』喉内撥音字の音形上の大きな違いとして二点挙げることが出来る。一つは、『文明本』の長拗音の問題である。通曾撰字の音形に、「 eウ」型の用例がある。通撰の「胸ケウ」「松セウ」「龍レウ」などと、曾撰の「憑へウ」「陵レウ」などがそれぞれである。同じ中世時代の『下学集』、『和玉篇』ほど多く現れていないが、出現が確認できない『名義抄』に比べれば異なった現象である。もう一つは「 eイ」型長音形の使用状況である。『文明本』では、系統的に呉音に対応したり単独に用いられたりしているのに対して、『名義抄』では、出現個所が少なく、多く某字の傍注という形で用いられており、勢力は弱い。

## 七、結語

以上各章の考察を通して見てきたように、両書喉内撥音の字音における呉音と漢音の分類は、韻尾、主母音、そして等韻という韻鏡の事項に関わりがあるところで共通点を持っている。しかし、『名義抄』は音注の表記が統一せず、字音体系の表示が不明確であるなどの点から、字音体系分類の韻鏡参考は徹底していなかったことが伺える。一方、『文明本』の呉音漢音の分類に、概ね韻鏡の事項が広汎に且つ系統的に反映されている。そういう食い違いのもっとも目立った現象として、「 eイ」型長音の使用状況を挙げる事が出来る。

梗撰三、四等字の「 eイ」型長音形の由来について、先行研究に論述が見られる<sup>10)</sup>が、定説は無いようである。ただ一つ、中国字音と関係なく日本字音の独創的なものとは考えがたい。いままで、中国古音に見られる「陰陽對轉」<sup>11)</sup>や古代方言の訛り<sup>12)</sup>、並びに中国現代方言における鼻音軟化<sup>13)</sup>等の報告があるが、それらの字音の中には日本字音の「 eイ」型長音に近似する現象があると思われないことはない。とりあえず一つ例を挙げてみると、陸游に「……秦人訛青字、則謂青為萋、謂經為稽……」云々の指摘がある。「萋」類と「稽」類の日本字音における「韻」の部分の読み方は、梗撰の「 eイ」型長音と似ていると考えられないか。勿論ここでは、単に音が似ていると思われると言っているだけで、事実とは別である、と断わらなければならない。日本字音の「 eイ」型長音は陸游の指摘した訛りや中国語自身の音韻変化などと接点があるか否か、またはその接点は何時、どこにあるかなどの問題は言うまでもなく要調査である。ただ、本稿の考察した結果から言えるのは、『文明本』著者の意図はどうであれ、そして「 eイ」型長音の由来や形成過程はどうであれ、結果として、『文明本』の「 eイ」

型イ長音音形はほとんど全部、しかも体系的に所謂呉音に対応しながら梗攝三、四等韻の枠に符合していることは事実である。その事實は、『韻鏡』の等韻原則が裏付けられていることを物語っている。

『名義抄』では、「 eイ」型長音と拗音との対立が認められるものの、使用個所が少なくしかも系統的ものになっていない。その現象は『文明本』と対照的なものとなる。両者を比較すると、『文明本』の音注状況から、梗攝三、四等字の呉音漢音の対応関係は大体形成していたという進化の徴を見出すことが出来る。

しかし、その反面、同じ梗攝三四等字の朱筆音注であるにもかかわらず、なぜ「頃」( p1087)などは「ケイ」ではなく、「キヤウ」なのか。なぜ「浄」( p710)「晶」( p1125)などは「セイ」ではなく「シヤウ(ジャウ)」なのか。そういうような用例は、少数ではあるが、今後の課題として考えたい。

#### 『文明本』朱筆音注用例

##### 〔通撰〕

<クウ>空 p227(東) <コウ>公 p20 功 p36 工 p71 攻 p29 孔 p38 鴻 p263 汞 p437 紅 p506 洪 p232 空 p832(東) 虹 p85(東送/絳) 控 p827(東・送/江) 貢 p137(送) <セウ>松 p152(鍾) <ソウ>崇 p132 葱 p259 叢 p388 忽 p638 恩 p406 聰 p637 聰 p376(東) 總 p343(董) 送 p21 粽 p161(送) 宗 p27(冬) 綜 p114(宋) <チウ>忠 p30 冲 p209 衷 p371 虫 p144(東) 仲 p18(送) <ツウ>通 p21 筒 p415(東) 桶 p138(董) 痛 p31(送) <トウ・ドウ>東 p125 董 p73 僮 p127 同 p36 桐 p127 洞 p94 銅 p61 侗 p1077(東) 動 p65 董 p1105(董) 棟 p128 働 p140(送) 冬 p126 鞞 p151(冬) 統 p36(宋) <ノウ>農 p282 膿 p475(冬) <フウ>風 p17 楓 p259(東) 諷 p627(送) <ホウ>蒙 p47 蓬 p94 豊 p101(東) 蜂 p50(東鍾) 鳳 p94(送) 鋒 p99 峰 p329 縫 p201 逢 p626 封 p139(鍾) 奉 p33 捧 p63(腫) 夢 p464(東送) <ム>夢 p464(東送) <モウ>蒙 p65 朦 p1072(東) <ユウ>融 p128 雄 p705 熊 p502(東) 勇 p41(腫) <ヨウ>熔 p10 容 p13 雍 p72 庸 p166 壘 p324 傭 p327 蓉 p619(鍾) 甕 p954(送) 擁 p221(腫) 用 p16(用) <レウ>聾 p901(東) 龍 p68(鍾) <ロウ>瀧 p3 隴 p1072(東) 籠 p10(東鍾) 哢 p49 弄 p49(送) <ユウ>翁 p90(東) <キウ>弓 p167 宮 p680 窮 p525(東) <キユウ>窮 p33 宮 p107(東) <ケウ>胸 p461 恭 p674(鍾) <キヨウ>匈 p839 兇 p839 凶 p121 共 p145 恭(ク井ヨウ) p224 蛩 p815(鍾) 供 p128(鍾用) 恐 p31 拱 p372(腫) 蝨 p815(腫鍾) 宏(キヨフ) p192 <シウ>充 p1037(東) <シユウ>終 p37 戎 p412(東) 衆 p17(東送) 種 p11(腫用) 縱 p69 蹤 p769 從 p96(用鍾) <シヨウ>訟 p404(東用) 鍾 p252 聳 p282 衝 p368 茸 p370 鍾 p918(鍾) 踵 p503(腫) 誦 p63 訟 p140 頌 p243(用) 從 p66(用鍾) <チユウ>中 p31 蟲 p460(東送) <チヨウ>濃 p28(鍾) 重 p19(鍾腫) 籠 p35(腫) <リヨウ>龍 p190(鍾)

##### 〔曾撰〕

<コウ>肱 p288 弘 p401 恒 p658(登) <ソ>曾 p789(登) <ソウ>增 p13 僧 p54 憎 p91 曾 p208(登) 贈 p63(磴) 甌 p663(證) <タウ>橙 p258(耕/磴) <トウ>藤 p127 登 p91 騰 p146 燈 p39(登) 等 p19(等) 鄧 p39(磴) <ノウ>能 p14(登等/～) <ハウ>棚 p331(庚耕/登) <ヘウ>憑 p122 氷 p791(蒸) <ホウ>朋 p27 棚 p99 崩 p90(登) 棚 p887(庚耕/登) <ヨウ>鷹 p16 應 p41 蠅 p57(蒸) <レウ>陵 p51 菱 p1031 綾 p452 凌 p491(蒸) <ユウ>應 p68(蒸) <キヨウ>兢 p232(蒸) 興 p18(蒸證) <シヨウ・ジヨウ>升 p12 稱 p27 繩 p59 稱 p73 承 p480 昇 p495 蒸 p707(蒸) 乘 p70 蒸 p111 丞 p1071(蒸證) 勝 p46 秤 p61 證 p145 剩 p769(證) <チヨウ>徵 p185 懲 p185(蒸) 澄 p16(庚/蒸) <ヒヨウ>氷 p65(蒸) <リヨウ>綾 p191(蒸)

##### 〔宕撰〕

<アウ>殃 p250(陽) 鴛 p213(陽唐) 快 p185(養漾) <カウ・ガウ>蜚 p815(陽) 綱 p125 岡 p208 剛 p242 昂 p715 康 p286 糠 p1044(唐) 桁 p10(唐/庚) 行 p15(梗唐) 向 p89 恙 p421(漾) 鯨 p747(?) <サウ・ザウ>相 p14 莊 p35 粧 p186 創 p83 槍 p181 瘡 p266 霜 p626(陽) 想 p223 爽 p807(養) 壯 p241(漾) 倉 p120 滄 p468 蒼 p750 藏 p125 桑 p34(唐) 類 p601(蕩) 喪 p10(宕唐) 葬 p83(宕) 臙 p266(?) <タウ・ダウ>湯 p3(陽唐宕) 當 p21 蟻 p265・p663 襠 p475 堂 p51 唐 p252 棠 p257 塘 p409 糖 p779(唐) 盪 p231(唐蕩) 黨 p27 儻 p69(蕩) 蕩 p25(蕩宕) 宕 p197(宕) <ナウ>囊 p45(唐) 曩 p434(蕩) <ハウ・パウ>芳 p

文明本『節用集』喉内撥音字の字音について(侯)

17方 p 19防 p 53坊 p 54妨 p 440亡 p 21忘 p 21房 p 23芒 p 422(陽)放 p 20紡 p 423髻 p 70惘 p 82(養)訪 p 388(漾)彷彿 p 70忙 p 30傍 p 69茫 p 82旁 p 299(唐)訪 p 69(宕)烹 p 84(?) <マウ>網 p 585(養)望 p 13妄 p 574(漾)莽 p 585(蕩) <ヤウ>陽 p 5様 p 23揚 p 108羊 p 225楊 p 411洋 p 562祥 p 977(陽)養 p 3(養) <ラウ>螂 p 265粮 p 267(陽)郎 p 160浪 p 206狼 p 213廊 p 448榔 p 1030跟 p 365(唐)朗 p 100(蕩) <ワウ>往 p 19王 p 20央 p 162(陽)凰 p 96横 p 237(唐)枉 p 285(養)誑 p 239(漾) <キヤウ>香 p 1郷 p 27薑 p 53強 p 79匡 p 464狂 p 25彊 p 94姜 p 811(陽)響 p 18仰 p 164襁 p 291(養)況 p 14向 p 36(漾) <クワウ>光 p 13荒 p 16黄 p 28遑 p 29徨 p 70潢 p 85皇 p 190篋 p 211惶 p 232遑 p 354蝗 p 503(唐)廣 p 21(蕩)纒 p 149曠 p 975(宕) <シヤウ・ジヤウ>裳 p 9床 p 30庄 p 390莊 p 188粧 p 612伴 p 35祥 p 70詳 p 970昌 p 62倡 p 42莖 p 745章 p 101璋 p 49障 p 68彰 p 769常 p 125相 p 149箱 p 162將 p 40漿 p 215牆 p 256牆 p 524薺 p 914嬌 p 1031嘗 p 343商 p 360觴 p 455殤 p 945尚 p 211徬 p 977 廂 p 1027湘 p 1079攘 p 203(陽)裝 p 924(陽漾)象 p 580像 p 223掌 p 339壤 p 409賞 p 91(養)上 p 19(養漾)讓 p 31唱 p 100狀 p 13匠 p 54醬 p 340償 p 115餉 p 253倡 p 250(漾) <シユウ>羨 p 100(漾) <シヨウ>羨 p 977(漾) <チャウ・ヂヤウ>張 p 11腸 p 45場 p 50(陽)長 p 48(陽漾)杖 p 6丈 p 12(養)脹 p 79帳 p 118帳 p 170暢 p 495(漾) <リヤウ>良 p 33梁 p 128粮 p 120量 p 64涼 p 188(陽)兩 p 36(養漾)亮 p 100諒 p 199(漾)掠 p 753(漾 / 藥)

〔江摂〕

<カウ>江 p 698(江)講 p 19頂 p 503港 p 945(講)降 p 19巷 p 195絳 p 750(絳) <サウ>雙 p 11(江) <ソウ>窓 p 277(江) <タウ>幢 p 59(江絳) <トウ>撞 p 420(江) <ハウ・パウ>邦 p 14(江)蚌 p 77棒 p 60(講)

〔梗摂〕

<アウ>鶯 p 473鸚 p 747櫻 p 772(耕) <カウ>更 p 23賡 p 29衡 p 78庚 p 257(庚)行 p 15(庚唐)亨 p 488(庚養)梗 p 653(梗)耕 p 282硿 p 675(耕)轟 p 125(耕諍)幸 p 272(耿) <コウ>宏 p 695(耕) <サウ>諍 p 34(諍)爭 p 187(耕) <ソ>嘈 p 201(耕) <ハウ・パウ>虻 p 649彭 p 56膨 p 927(庚)棚 p 331(庚耕)登)萌 p 856(耕)迸 p 111(諍) <ホウ>棚 p 887(庚耕登) <マウ>盲 p 569(庚)甕 p 5(耕)孟 p 762(映) <ヤウ>瓔 p 557(清) <ワウ>穢 p 862(梗) <キヤウ>杏 p 6境 p 90(梗)頃 p 1087(清靜) <クワウ>紘 p 62(耕)鑪 p 749(梗) <シヤウ・ジヤウ>笙 p 925(庚)箏 p 926(耕)諍 p 140(諍)晶 p 1125(清)淨 p 710(勁) <ニヤウ>獐 p 13(庚) <エ>營 p 41(清) <エイ>英 p 53榮 p 62瑩 p 700(庚)影 p 217永 p 704(梗)詠 p 184映 p 702(映)盈 p 76嬰 p 320纓 p 701瓔 p 557(清) <ケイ>脚 p 15京 p 68兄 p 15驚 p 21迎 p 63荊 p 210鯨 p 503(庚)檠 p 342(庚映)景 p 6警 p 41境 p 523(梗)敬 p 23慶 p 70竟 p 84競 p 590(映)莖 p 12(耕)傾 p 21頸 p 415瓊 p 281(清)輕 p 36(清勁)薑 p 381勁 p 596(勁)形 p 10刑 p 64馨 p 848(青)經 p 41(青徑)脛 p 58警 p 683(迥)磬 p 593徑 p 887(徑)莖 p 12(耕)螢 p 603(庚徑)響 p 902(養) <セイ>生 p 3(庚映)省 p 84(梗靜)征 p 10聲 p 13清 p 18精 p 127成 p 21城 p 2盛 p 79晴 p 52誠 p 109(清)請 p 29(清靜)鯖 p 778(清青)靜 p 138整 p 150井 p 3(靜)政 p 18聖 p 25姓 p 71(勁)青 p 28星 p 97(青)醒 p 28(青迥徑)鯖 p 129(青清)脛 p 447(青徑) <テイ>程 p 16醒 p 792貞 p 162(清)呈 p 63(清勁)逞 p 372(靜)鄭 p 302(勁)庭 p 85蜓 p 129丁 p 145叮 p 737停 p 151(青)釘 p 497廷 p 392(青勁)挺 p 11(青迥)鼎 p 298頂 p 41艇 p 623訂 p 879(迥)打 p 173(迥梗)汀 p 433定 p 20(徑) <ネイ>佞 p 122甯 p 430佞 p 442(徑)寧 p 286擘 p 737(青) <ヘイ>平 p 10兵 p 32(庚)評 p 438(庚映)炳 p 119丙 p 119(梗)瓶 p 11(青)柄 p 11病 p 53(映)抨 p 424(耕)餅 p 267(靜)併 p 753(靜迥勁)俔 p 802(勁)屏 p 112(清青靜)并 p 151(清勁)萍 p 118(青)並 p 220(迥)摒 p 112(國字) <メイ>明 p 29盟 p 62鳴 p 433(庚)命 p 27(映)名 p 3(清)銘 p 463螟 p 755溟 p 772冥 p 880瞑 p 884(青)酪 p 879(迥) <レイ>令 p 25(清勁徑)嶺 p 209(靜)鷓 p 8齡 p 141零 p 200冷 p 299蛉 p 252伶 p 374鈴 p 375翎 p 414聆 p 856(青)

『文明本』墨筆音注用例

〔通摂〕

<ク・グ>公コウ p 500宮キョウ p 501功コウ p 536工コウ p 549(東)孔コウ p 502(董)貢コウ p 502(送)供キョウ p 503胸キョウ p 549恭キョウ p 544供キョウ p 191(鍾) <グウ>宮キョウ p 7窮キョウ p 462(東)空無し p 160(東送) <シユ・ジユ>衆シユウ p 908終シユウ p 901(東)宗シユウ p 931(冬)鐘シヨウ p 908(鍾送)頌シユウ p 970(鍾用)腫シユウ p 923(腫)種シユウ p 915(腫用)誦シヨウ p 285(用) <シユウ>宗ソウ p 349(東) <ソウ>忽無し p 407(東) <タウ>冬トウ p 619(冬) <ヅ>桶トウ p 191(董) <ノ>濃チヤウ p 885(鍾) <ノウ>農無し p 491(冬) <フ・ブ>馮無し p 620(東)風フウ p 618(東送)封ホウ p 598(鍾宋)奉ホウ p 621(腫) <ム>夢ホウ p 664(東) <ユ>勇ヨウ p 868(腫) <ヨウ>用無し p 317(用) <ロ>籠ロウ p 131(東鍾董) <ラウ>擁ヨウ p 221(腫)

〔曾摂〕

<グ>弘コウ p 541(登) <コウ>興キョウ p 652(蒸證) <ソ>曾ソウ p 208(登) <ト>登トウ p 490(登) <ノウ>能ノ p 490(・登等代)凌レウ p 491(蒸) <ラウ>鷹ヨウ p 227(蒸)應ヨウ p 280(蒸證)



## 〔宕摂〕

<カウ・ガウ> 強キヤウ p 457 郷キヤウ p 672 強キヤウ p 284(陽)向キヤウ p 36(漾)仰キヤウ p 832(養漾)  
 <ゴウ> 剛カウ p 973(唐) <サウ・ザウ> 相無し p 786(陽漾)象シャウ p 778 像シャウ p 792(養) <ス>  
 相サウ p 1129(陽漾) <ソク> 箱無し p 384(陽) <タ> 宕タフ p 741(宕) <タウ> 湯無し p 366(陽唐宕)  
 棠無し p 257(唐) <ホウ> 方ハウ p 94(陽) <マウ> 忘ハウ p 67(陽漾) <ヤウ> 様無し p 560(陽唐)  
 <ラ> 良リヤウ p 432(陽) <ワウ> 往無し p 37(養)皇クワウ p 234 黃クワウ p 234(唐) <キヤウ・ギヤウ>  
 羌ケイ p 916 香無し p 816(陽)行カウ p 852(唐庚宕映) <シャウ・ジャウ> 床無し p 1092(陽) 状無し p 404  
 匠無し p 831(漾) <チャウ> 場無し p 354(陽) <リヤウ> 量無し p 1127(陽)

## 〔梗撮〕

<エ> 柄 エノヘイ p 702 映 <ケ> 景ケイ p 605(梗) <ソ> 噌無し p 890(耕) <タ> 打テイ p 340(梗迥)  
 <ヤウ> 影無し p 562(梗) <ヤウ> 盈エイ p 562(清) <ロ> 癭エイ p 44(靜) <キヤウ> 脚ケイ p 500  
 京ケイ p 809 兄ケイ p 813 驚ケイ p 816(庚)境ケイ p 810(梗)輕ケイ p 830(清)鏡ケイ p 817 敬ケイ p 833  
 敬ケイ p 544(映)莖ケイ p 12(耕)刑ケイ p 814 形ケイ p 852(青)經ケイ p 817(青勁) <シャウ・ジャウ>  
 > 生セイ p 915(庚映)正セイ p 908 請セイ p 943 盛セチ p 953 清セイ p 970 聲セイ p 972 成セイ p 952 城セイ  
 p 907 情セイ p 62 正セイ p 385(清)精無し p 907(清勁)靜セイ p 140 井セイ p 713(靜)聖セイ p 916 性セイ p 978  
 淨無し p 924 性セイ p 16 聖セイ p 107 姓セイ p 135 政セイ p 337(勁)星セイ p 930(青)青セイ p 924(青靜勁)  
 <チャウ・ヂヤウ> 杏キヤウ p 6(梗)打テイ p 173(梗迥)丁テイ p 157(耕青)貞テイ p 162(清)停テイ p 175  
 廳テイ p 182(青)聽テイ p 181(青徑)町テイ p 186(青銑迥)挺テイ p 11(青迥)頂テイ p 414(迥)定テイ p 159(徑)  
 <ヒヤウ・ピヤウ> 兵ヘイ p 1026(庚)評ヘイ p 1041(庚映)平ヘイ p 1043(仙庚)病ヘイ p 100(映)屏ヘイ p 1035  
 (清青靜)并ヘイ p 192(清勁) <ミヤウ> 鳴メイ p 1043 明メイ p 888(庚)命メイ p 901(映)名メイ p 888(清)  
 冥メイ p 894(青)猛マウ p 13(梗) <リヤウ> 令レイ p 102(仙清蕭勁徑)領レイ p 66(靜)靈レイ p 188  
 苓レイ p 619 鈴レイ p 622(青)

○漢字例の後に付いているのは見出し字の右側墨筆音注に対応している左側の朱筆音注のことである。その対応がなければ無しとして示した。

## &lt;注&gt;

- 1) 例えば、湯沢質幸「中世唐音の周辺」(『唐音の研究』 勉誠社 昭和六十二年二月二十五日)、中田祝夫「文明本『節用集』のために」(『文明本節用集研究並びに索引』「影印篇」 勉誠社)など。
- 2) 川瀬一馬『古辞書の研究』第三篇第九節(講談社版 昭和三十年十一月二十日)。
- 3) 本稿文中表記の便宜上、両書の音注引用は以下のように設定している。『文明本』音注例の墨筆朱筆対応の場合は、「某字 / 」の形で示し、朱筆のみの場合は、右左を問わず「某字」と示す。『名義抄』の音注例は、下注の場合、「禾(音)」「音」と、傍注の場合、「某字」の形で示す。
- 4) 耕・嶝韻「橙 呉、登」(佛下本九四)みたいな用例も無表記の可能性は考えられるが、本稿では基本として仮名音注が付している例のみ扱っているので、呉音類音字(漢字)は取り入れていない。
- 5) 本稿に採用した『和玉篇』は中田祝夫・北恭昭編「和玉篇研究並びに索引」(風間書房刊 昭和四十一年六月一日)による「慶長十五年版本」。『下学集』は狩谷掖齋自筆校正本『下学集』(古辞書叢刊 雄松堂書店 昭和四十九年九月二十五日)。
- 6) 沼本克明「平安後期以後の漢字音」(国語学叢書 10『日本漢字音の歴史』第三章 東京堂出版 昭和六十一年六月五日)。
- 7) 「相サウ」(p 14)「~シャウ」(p 149) <下平十陽~息良切/去聲四一漾~息亮切>「莊サウ」(p 35)「~シャウ」(p 188) <下平十陽~側羊切>「粧サウ」(p 186)「~シャウ」(p 612) <下平十陽~側羊切>「庄サウ」(p 805)「~シャウ」(p 390) <下平十陽~側羊切>。
- 8) 沼本克明は、河野六郎の硬口蓋音-ŋ'の説に続いて「日本漢字音において梗撮字が『eイ』と転写されることになったのは、.....唐代に入ってその鼻音性を減じたことに伴って、介母-i- -ĩ-と前舌の主母音e eなどとの総合的な影響関係の結果『i』に近く聞き取られたものであろう。」(沼本克明『日本漢字音の歴史』(国語学叢書 10)序章第三節二韻 東京堂出版 昭和六十一年六月五日)といわれている。筆者は氏のこの説にどんな事実が裏付けられているかという疑問を持っている。
- 9) 湯沢質幸『唐音の研究』第三章・4(勉誠社 昭和六十二年二月二十五日)参照。
- 10) 前掲注9。
- 11) 王力は「語音の發展」(『漢語史稿』第二章)で孔廣森の「陰陽對轉」説をふまえ、「之蒸對轉」の例として「寺等、疑凝、乃仍」三例、そして、広韻の「能、奴來切、又奴登切。徵、陟陵切、又陟里切。」二例を挙げている。

文明本『節用集』喉内撥音字の字音について(侯)

- 12) 南宋詩人陸游の『老学庵筆記』(卷六)に、方言音の食い違いについて「四方之音有訛者、則一韻尽訛。如閩人訛高字、則謂高為歌、謂勞為羅。秦人訛青字、則謂青為萋、謂經為稽。……」とある。「青為萋」とは青韻字を齊韻の発音をし、「經為稽」とは、青韻又は勁韻字を齊韻又は齊韻の発音をするということの意味しているであろう。
- 13) 黄景湖『漢語方言学』に挙げられた福建大田后路話の用例に「兄、庚」などの梗撰所属字がある。「兄」の音注は[xi·xi]と、「庚」は[kī]と記されている。

< 主要参考文献 >

- (1) 日本国立国会図書館蔵本文明本『節用集』(中田祝夫「文明本節用集研究並びに索引」影印篇・勉誠社)
- (2) 観智院本『類聚名義抄』(『類聚名義抄』全参卷 風間書房 昭和二十九年五月十五日)
- (3) 狩谷掖齋自筆校正本『下学集』(古辞書叢刊 雄松堂書店 昭和四十九年九月二十五日)
- (4) 川瀬一馬『古辞書の研究』(講談社版 昭和三十年十一月二十日)
- (5) 湯沢質幸『唐音の研究』(勉誠社 昭和六十二年二月二十五日)
- (6) 沼本克明『日本漢字音の歴史』国語叢書 10 (東京堂出版 昭和六十一年六月五日)
- (7) 王力『漢語史稿』(修訂本)(中華書局 1980年6月)